

埼玉育ちのグローバル人

日本からロシア、そしてハンガリー



埼玉県マスコット
「コバトン」

第1回 「埼玉時代」

ロシア科学アカデミー・スラヴ学研究所研究員

木村 香織さん



2022年2月24日、ロシアがウクライナに侵攻した。モスクワ大学歴史学部で修士・博士課程を過ごした私にとって、このロシアのウクライナ侵攻は単なる対岸の火事ではあり得なかった。2月24日の朝、キエフが攻撃されたとのニュースを聞いた瞬間から、何か得体の知れないものが体中を駆け巡っている様な気がして、その日は1日中何も手がつけられなかった。それから数日、ウクライナからの難民が国境を超えて逃げてくるハンガリーに住む私には何ができるだろうと考え、ハンガリーのNPOに正式に登録してボランティア活動しようとした。このボランティア活動については、第3回の「ブダペスト時代」で詳しく述べるのでここでは書かないが、このボランティア活動から学ぶことは多い。

さて、仕事の研究とボランティア活動をこなしていた2022年上半期であったが、夏に実家の事情で一時帰国することになった。実家にいる期間は数ヶ月あったので、日本に避難しているウクライナ難民支援ボランティアで私にできることはないかと埼玉県国際交流協会の方に問い合わせた。そのご縁があり、今回「埼玉育ちのグローバル人～リレーエッセイ～」の依頼を受けることとなったが、第一回には私の土台となる埼玉時代のことを書こうと思う。埼玉に生まれ育った私が「グローバル人」と呼べる要素をどの様に培ったのか、考えてみたい。



中国研修：北京66中学との交流
(筆者は前列中央2人の女子学生のうちの右側)

私は生まれも育ちも埼玉県。生粋の埼玉っ子で、自称「武州の女」である。高校は埼玉県立春日部東高等学校の人文科を選んだ。元々理系よりは文系科目が得意であったこと、人文科のカリキュラムに入っている「課題研究」をやりたいかったこと（一つのテーマについて半年～1年かけて調べ、文章にまとめる。これが人文科卒業の必須科目だった）、そして何より人文科のプログラムの中に「中国研修」があったことがこの学校を選んだ決め手だった。高校時代は部活で剣道に打ち込んでいたため勉強漬けの毎日というわけではなかったが、でも前述の「課題研究」と「中国研修」準備には真剣に取り組んだ。この二つ（それと剣道）が現在の私を形成している最初の大きな点だったのではないかと思う。



剣道部集合写真
(筆者は2列目左から4番目)

春日部東高校人文科2年生になると「中国研修」の準備が始まった。私にとっては初めての異文化との繋がりであった。紫禁城・万里の長城・京劇、ダイナミックな大陸の建築物や文化に私は圧倒された。ただこれだけだったら単なる北京観光で終わってしまうのだが、「中国研修」と名が付いているからにはもう一つ大きなプログラムがあった。春日部東高校は当時北京第66中学校と交流があり、私たちはそこに行って現地の学生たちと交流したのである。同年代の学生たちとお互いの文化について紹介したり、意見交換したり、一緒に歌を歌ったり、ランチの餃子作りをしたり。初めての異文化との繋がり、とても刺激的だった。共通語は英語であったが、幸いにも、私は英語を話すことに抵抗がなかったため、この交流会は一生忘れることのできない思い出となった。その時友人になった北京の子とは20年以上経った今でも連絡を取り合っている。



中国研修：天安門広場にて
(筆者は前列左端)

さて、中国研修から帰ってくると「課題研究」が

始まった。普通科の高校ではまず必須ではないと思うが、大学で言うところのいわゆる卒業論文である。私はこのテーマに「歌舞伎」を選んだ。当時、私は歌舞伎が好きであったのだが、その歴史はあまり詳しく知らなかったこと、そして、自分の生まれた日本の文化についてもっと詳しく知りたいと思ったことがこのテーマを選んだ理由であった。自分の生まれた日本についてもっと詳しく知りたいと思ったのは、中国で異文化（中国の伝統芸能である京劇）に触れたことがきっかけであった。私は本を読み、調べ、考え、文章を書いた。これは今の私の職業である歴史学とも繋がっている。あの時書いたものは論文とは呼べるものではないが、それでもやはり、物を書く私の原点である。



中国研修：雑技団のステージにて
(筆者は前から2列目左から2番目黄色い服)

異文化に目を向けるきっかけはどこにでも転がっているのではないかと思う。それがいかにその人に響き、その後の人生に影響を与えるかというのは受け取る側によると思うが、このエッセイリレーのタイトルには「グローバル人」とあるが、私はそれを意識したことは今までなかった。ただ、私のこれまでの人生の中の要所要所で「グローバル人」を形成する要素、「自己を形成する文化的背景（又は、アイデンティティー）」の認識、「異文化への理解」、そして「語学力とコミュニケーション能力」を養う機会があり、それらに注目して生きてきたのだと気付いた。今考えてみると、全ての事象は繋がっており、今の私が形成されたのだということを強く実感している。